39

デジタルゲートを使った移動は距離を短縮できる。デメリットもある。現実世界内、デジタルワールド内をそれぞれ直接結ぶことはできず一度は別の世界を経由しなければならない。九龍城寨保護区からアラモ砦へは泉研究所のゲートを経由していた。屋上に二台のモニタを距離を離して向かい合わせに設置。どちらもゲートを開いたままにしてあるその間を大輔とデジモンたちが通り過ぎていき、最後に賢。京とハイタッチしてアラモへのゲートに入って行った。

「移動終わりました。ゲート閉じます」

一階メイン研究室の中央モニタ前のコンソールにメノア、隣のモニタ前には光子郎がいる。

「これからが本番ね」

「メノアさんのおかげですよ。僕だけではこんな装置」

「もっと大掛かりなはずだったけど、記憶が曖昧なとこがあって。本番までに直すつもりだったのに、バグも残ったままだし」
「そうだ、それルイくんに説明しとかないと」
光子郎の後ろにいるタケルが答えた。
「それはぼくがやっときますよ」
「お願いします」
光子郎はモニタのゲンナイにも話しかけた。
「では、そちらもよろしくおねがいします」
ノートパソコンを小脇に立ち上がる。研究室前でタケル、パタモンと光子郎、テントモンは左右に分かれた。
「じゃ、気をつけて」
タケルは応接室へ
「そっちこそ！」
光子郎は地下へ向かった。

40

地平線から迫る、雲のようにも見えるほどの黒い大群。画面をズームする。雲を構成する粒の一つ一つがデジモンの形をしている。

「間違いないな。ダークタワーデジモンだ」

太一の装着しているゴーグルは光子郎の手でいくつかの電子的機能が付けられていて、構造組織の分析もある程度できた。

「じゃあますます遠慮することはないな」

ヤマトは手袋の緩みを直す。

「そんなのしたことないくせに」

二人はデジヴァイスを握りしめた。

41

「別に懐かしくはないよなあ」
アラモ砦外壁上に大輔、賢、ミミとウォレスとそのパートナーデジモンたちがいる。南から黒いデジモンたちの大群が近づいてきて、密林はもう半分も見えなくなっている。
ダークタワーデジモンとは元々はその名の通りダークタワーから作られた、デジモンの形をした何か別のものだ。通常のデジモンらしい心はない以外はほぼ同じ機能を持つ。大輔たちはその黒いデジモンともかなり戦った。十年以上前のことになる。
「ただのダークタワーデジモンじゃない。かなりやばいのが混じってる」
光子郎経由で情報を聞いていた賢が眉を顰めた。
「ああ、見えてきた。あいつらめんどくさいよなあ」

黒い雲のようなデジモンの群れを率いてるのはスカルサタモン、翼のある骸骨のようなデジモンだ。元のそのデジモンには苦い目に遭わされたことがある。
「まあ、おれたちは負けねえけど」
「もちろんだ」
ブイモンとワームモンが進化の光を発しはじめた。

42

「ええー、ぼくだけかあ知らなかったの」
療養所で城戸シュウが兄のシンと弟の丈を交互に見ていた。
「ぼくがここに赴任する時に言わなかったっけ？」
「あの頃は京都で忙しかったから、あまりこっち帰ってきてなかったんだっけ、それにしても青森もずいぶん急だなあとは思ったんだけどさあ」
意識不明で発見された西島大吾から、デジモンと共通する微弱な電磁波が時々発せられており、姫川マキが近くにいるとそれが強くなることを光子郎が発見。同じ周波数は望月芽心、少し違うものがウォレスやメノアからも検出されていた。最初の内は、今この世界の太一たちと違う記憶を持つものを送り込んで心理的な混乱や不安を内部から起こそうという、何者かの悪意によるものではないかという推論もあった。しかし彼ら自体に悪意があるわけではなく、西島、姫川以外はむしろ協力的だったため、別の仮説が立てられた。

太一たちを敵と狙う何者かが攻撃する際のマーカーとして利用されてるのではないか。もしそうだとすると、都心の病院は危険だった。攻撃された際、周囲への被害が大きすぎる。とりあえず、もし襲撃されてもいいように周辺に民家がない病院へ移送し、その監視役兼緊急時の守護もできる、パートナーデジモンを持った医師として城戸シンが任命された。裏側の手配はＮＧＯ団体「ＤＭＨ」の高石奈津子がやったようだ。他のマーカーかもしれない芽心、ウォレスは防衛しやすいデジタルワールドの保護区にいる。メノアのいる研究所は彼女自身の研究を応用した独自のシステムがあった。本格的な実用まであと半歩というところに大和田ルイが訪れ、例の周波数に異常が検出された。ルイとメノアが近づいたことが原因かもしれない。システムの稼働もすぐにはできないが、何より太一がジュネーブに行っている。時間稼ぎをする必要があった。それでタケルがルイに同行して東北までいくことにしたのだった。

「何かが襲ってくるなんて杞憂に終わればいいなあと思ってたんだけどね」

シンの口調は落ち着いてるが、目は鋭く外を見据えていた。

「結果は見ての通りだ」
ラウンジの大きく開いたガラス戸から見える暗い森。何か大きなものが蠢いている。ダークタワーデジモンだ。
「結構数が来てるな」
マーカーと目される人物を分散させることで危機も分散する計画だった。もしどこか一箇所が襲撃されても太一たちが揃っていれば何とか対処できるはずだ。しかし実際には四箇所同時に襲撃という事態になった。しかもそれぞれの場所に敵の数が多い。
「デジタルワールドに比べると相手がかなり少ないとこだけが救いかな」
「こっちの世界に出現させるのって、結構手間なんだろうね」
丈も油断はしていない。
森の黒い影が動いた。丈たちがデジヴァイスを構える。森の手前の地面にいる三体のゴマモンが進化の光を発し始めた。左右にいる伊織のアルマジモン、本宮ジュンのコドクグモンも。

43

泉研究所は元々が倉庫だ。一階は応接室、研究室などに分けられているが仕切りを取り払った地下はかなり広く、余分な照明はつけてないので暗い。その中央に小さな一軒家ほどの大きさの装置があり、周辺にケーブルが這っている。壁を背にスタンド型のパソコンテーブル。光子郎がコマンドを打ち終わり顔を上げた。装置と光子郎の間にはテントモンがすでに進化して待機している。五メートルほどの高さの直立したカブトムシのようなデジモン、カブテリモンだ。

「いきますよ、カブテリモン」

「まかしとくんなはれ！」

カブテリモンが力を込めると腹部の前方に渦巻く電流の塊が出現した。四本の腕を大きく広げて装置めがけて放つ。装置の前面の受容パネルがその電撃を受け止めた。装置全体に電流が行き渡り起動する。

装置中央部から不可思議な光が広がった。

本来は通常の電力で稼働するように進めていたのだが、まだ現状では起動時のみ莫大な電力がかかってしまう。それを解決するためカブテリモンの電撃を変換するパネルを設置したのだった。もちろんカブテリモンは装置を破壊しないように電撃を調整している。

研究所の屋上で待機していたヒカリと京、その兄姉たちがネフェルティモン、ホルスモンに乗って飛び立った。デジモンたちの胴にはベルトが巻かれ、ケーブルがつながっている。

「展開開始！」

京の声で五体は大きく広がった。屋上から繋がるケーブルに光が伝わり、五体へのケーブルの結節点を中心に不可思議な光が広がっていく。地下の装置からの光だ。デジタルの網のような光の幕が地上まで伸びて研究所の周囲を覆い、すぼまって建物全体と重なって光が消えると、その数分前と何も変わらないように見えた。違うのはその範囲内にいた黒いデジモンたちが見えなくなったことだ。

「疑似デジタルワールド、展開完了」
光子郎はモニタから顔を上げてカブテリモンにも声を掛けた。
「おつかれさまでした」
「いやいや、それほどのことはしてませんて」
パソコンからメノアの声が流れてくる。
「やったわねイジー」
「ぶっつけですが、上手くいきましたね」
メノアと光子郎は擬似デジタルフィールド発生装置を開発していた。実行範囲内にいるデジモンとデジヴァイスを持つ人間だけを現実空間のサブ空間のようなものに移送できる。メノアの記憶にある電脳空間を作る技術の応用で、これによりデジモン同士が戦っても現実の建物や人々に被害を及ぼさなくて済む。しかしまだ開発途中で実行範囲と時間の制限があり、メノアがバグのようなものと呼ぶ現象も起きていた。
「あとは作戦終了まで持ってくれれば」

44

大和田ルイは呆然と立ち尽くしていた。研究所の応接室にいるはずだ。それがまるで別の空間に放り出されたように、全体が見慣れない光りに包まれ、さっきまですわっていた椅子がどこにあるのかすら分かりにくくなっている。よく見れば椅子やテーブルはそこにある。応接室に未だいることは間違いないらしい。その奥にあるモニタも見える。だがそこに映されていた光景が、モニタの枠を超えて手前の空間に大きく浮かんでいた。見回すと周辺の壁の手前にも別の光景がある。しかも奥行きのある立体映像だ。映されているのはデジタルワールドの二つの保護区周辺、丈たちのいる療養所周辺、そして今この研究所周辺の風景だった。ただし研究所周りだけは通常の夜景ではなく建物の輪郭が妙な色の光を放っている。現実世界の光景ではなく擬似デジタルフィールド内のものだ。フィールドが発生した途端、室内の様子が変化したのだった。メノアの言う「バグのようなもの」がこの作用だった。

元はモニタに分割画面として表示されていた各地の現状が、何枚もの大きな立体映像となったことで部屋の元の大きさすら分かりにくくなっている。ここに来る途中の廊下が足元に光源を設置してあるのが珍しいと思ったが、こうなった時に道に迷わないためだったのだろうか。そうかすかに思ったが、ルイが唖然としている原因はその現象ではなかった。タケルがこんなことが起きるからと前もって言ってくれていたので、そこはある程度予想通りだ。それよりも映し出されている映像の中身、デジタルワールドの光景が衝撃的だった。

どちらの保護区も広大な平野の中にポツンとある。そこへ黒い絨毯が迫っていた。どうカメラを設置してあるのか、かなり高いところからの俯瞰の画面では小さなお菓子箱に群がりくる蟻の大群のようにも見える。もちろんそれは蟻などではなく全て黒いデジモンだ。どれほどの数になるのか。砦には何人いるのか。そのうち戦えるデジモンは何体くらいいるものなのか。それがいくら強くても、この数に対抗できるものなのか。

デジタルワールドだけではない。海辺から登った林の中の療養所、都会のビルに囲まれたこの研究所の画面もある。暗くて分かりにくいが、どちらの周囲にいるデジモンもかなりの数ではないのか。

その黒いデジモンたちに変化が起きた。九龍城塞正面の一団が加速、黒い絨毯の一部が槍の穂先のように尖り、砦に迫った。強行突破する陣形だ。

城砦から赤い光が飛ぶ。

黒い絨毯の尖った部分が一瞬で消し飛んだ。

なにがおきた

ルイが目を見張ってる間に砦から青白い人型のものが飛び出した。まだ距離があったはずなのにあっという間に黒いデジモンの群れに飛び込む。ガブモンの完全体、人狼型のワーガルルモンだ。速度を落とさないまま奥へ進む。周辺のデジモンたちが切り飛ばされ次々に消滅していく。

砦から赤い光の二撃目が飛んだ。光ではなく、噴射炎でその先は有機体ミサイル。アグモンの完全体メタルグレイモンの武器だ。黒いデジモンたちの一帯がまた消し飛ぶ。砦から頭部や胴、左腕を金属で覆われたメタルグレイモン本体が出てきた。三本の金属爪がついた左腕先を飛ばす。それだけで数体のデジモンがまた消し飛ぶ。左腕は本体とチェーンで繋がっており、それをぐる、っと大きく振り回し数十体のデジモンが薙ぎ払われた。

別の画面では二本足で直立した青い竜のようなデジモンと、緑の昆虫のような人型のデジモンが黒いデジモンたちを打ち砕き、黒い絨毯の中央に切れ目を作っていってた。ブイモンが進化したエクスブイモンと、ワームモンが進化したスティングモンだ。絨毯の切れ目は閉じていき、エクスブイモンとスティングモンを取り囲む形になった。

二体が光を発し、一つになる。光が収まると合体、ジョグレス進化したパイルドラモンが現れた。左右の腰の生体砲からエネルギー波を連発、ぐるりと一回りするだけで周囲の数百体のデジモンたちが砕かれた。

さらに別の画面。テイルモンと、ホークモンが進化した赤い鳥型のデジモン、アクィラモンがジョグレスしてマスクをした人のようなデジモン、シルフィーモンとなっていた。両腕からエネルギー波を放つ。研究所の屋上に飛び移ろうとしていたデジモンたちが次々に散っていった。

療養所の画面では丈のゴマモンが進化した完全体、亀のような甲羅を背負ったズドモンがハンマーの一振りで何体もの黒いデジモンを打ち砕きつつ進んでいる。その左右でシュウのゴマモンが進化した雪の巨人ユキダルモンと、シンのゴマモンが進化した白い長帽子を被った魔法使いのようなソーサリモンがそれぞれデジモンたちを攻撃する。だが凄まじい破壊力で右側から真っ先に攻め込んでいくのは本宮ジュンのアルケニモンだった。左右の手から伸びる数本のワイヤーが黒いデジモンたちを切り刻む。伊織のアルマジモンの成熟期、アンキロモンは全身を硬い表皮に覆われて守りに強い。丈たちの守護のため後方に位置していた。

立体映像で各所の戦いを見ていたルイは、やっと太一や大輔たちのデジモンの強さがわかった。これだけの戦力を一箇所に集めていれば、特に現実世界の療養所やこの研究所規模の守りならば何も心配することはなかったかもしれない。だが敵の勢力は分散している上にデジタルワールドの二つの砦、アラモと九龍城塞に攻めてくる数があまりに多すぎる。メタルグレイモン、ワーガルルモンやパイルドラモンはあえて敵陣の真ん中に突っ込むことで砦方向への進行を食い止めようという作戦だということも分かった。それでもこの敵の数を全て処分することができるものだろうか。もし出来るとしても何時間かかるのか。そこまでエネルギーは持つのか。現に彼らを取り囲んだ黒いデジモンたちの輪は次第に狭まってきてるのではないか。黒い絨毯の左右両翼は砦の方に向かおうとしている。そちらを守るデジモンたちの戦力は十分なのか。九龍城塞とアラモ砦、二つの画面を見比べるうちに、別の動きに気がついた。

アラモ砦のそばを通る線路に何かが走っている。東の方から近づくそれに画面が自動的にズームした。列車のように見えた。

あれは

（トレイルモン。あれもデジモンだよ）

久しぶりに頭の中に聞こえてきた声に驚いていると、トレイルモンが砦の手前で止まり、六人の子どもが飛び出てきた。南側、黒いデジモンたちの方向に。

あれもパートナーヒューマンなのか。しかし、一緒にいるはずのデジモンたちがいない。と、見る間に六人はバーコードのような光に包まれデジモンに姿を変えた。

（彼らは、人間でデジモンなんだ）

そんなこともあるのか

だがもっと驚くのはその戦闘力だった。六体それぞれがメタルグレイモンやパイルドラモン並、いやそれ以上に強いかもしれない。黒いデジモンの東側はあっという間に駆逐されていく。

（彼らはここことは別の世界から来たんだ。そこは、こう呼ばれてる。

『デジモンフロンティア』

そういうタイトルのテレビアニメ）

アニメの世界？　どういうことなのかルイがわからずにいると

（そしてあちらは）

九龍城寨の画面。西から攻めてくる黒いデジモンたちの、南の一角に次々に爆発が起きた。そちらから別のデジモンの一群が攻めてきていた。その集団の中にいる人間だけでも十人以上、デジモンの数はその数倍はいそうだ。先頭の少年が砦に手を振っている。砦で太一が手を振りかえしている。

（彼は工藤タイキ。去年、助けてもらったお礼をするって、みんな連れてきた。彼の世界は、『デジモンクロスウォーズ』
以前そこが危ないことになって、いろんな世界からデジモンとテイマーが助けに行ったことがあったんだよ）

テイマー？

（ぼくの世界ではデジモンと対になってる人間をテイマーって言うんだ。その世界の名前も『デジモンテイマーズ』）

それもやはりテレビアニメの世界なのか

（他の世界から見ればそうだろうけど、ぼくには本当の世界。ぼくから見るとこの世界もテレビアニメの世界なんだよ。
『デジモンアドベンチャー』って呼ばれてる）

この世界も？

（ぼくは訳があって、ちょっと未来から来たんだ。今いるのは、いろんな世界の狭間というか。おかげで他のデジモン世界にアクセスして助けを呼んでこれたんだけどね）

九龍城寨周辺に別の一群が現れた。中心にいるのはゴーグルをした緑の髪の少年と赤いヘルメットを被ったようなデジモンだ。

（かれらは『アプリモンスターズ』という世界から。その世界にアグモンが行ったこともあったって。彼らはデジモンとはちょっと違うかもって心配もあったみたいだけど、問題なさそうだね。九龍城寨に縁があったみたいだし）

研究所屋上の画面に別のデジモンたちが映っている。丸い眼鏡の少年を中心に、数人がいてそのパートナーデジモンたちのようだ。彼らも強い。研究所に向かってくるデジモンを防いでる。

（彼らは『ビートブレイク』という世界から来てもらった。かなり未来の世界らしい）

そんなにいろんな世界から。

（最初にこの世界に接触して、君の声が聞こえた時、君にはこの研究所に行くよう勧めたけど、その時はその裏に何か黒い力が関係してるってわからなかったんだ。それでこの世界のデジタルワールドのゲンナイさんという人にも接触してあわてて準備進めてきた）

ゲンナイの名はタケルの話でも聞いた。今でも現役なのか。

（そしたらクロスウォーズの世界を助けに行った時よりも、デジモンに関係した世界は増えてる。そっちも呼ぶといいだろうし、って。別のルートもアドバイスしてもらって、お台場に残るデジモンの思念とも話して。ちょっと変わった世界からもきてもらったよ）

クロスウォーズの軍も強力だ。黒い絨毯の南側は次第に崩されていった。画面が北の方にズームする。

そこに小さな翼のある犬のようなデジモンがいて、見る間に大きな赤い龍のようなデジモンに進化した。一体で黒いデジモンを次々に倒していく。その傍らに長い帽子を被った魔法使いのようなデジモンがいる。

（彼らの世界にも接触できた。お台場のウィザーモンの思念が他の世界のウィザーモンと連絡できるかもって）

名前は聞いていた。あれがウィザーモンなのか。

（彼ら、ちょっと質感が違うと思わない？）

言われて見ればそんな気もするが、何が原因なのかわからない。

（彼らの世界は、『デジタルモンスター　ゼボリューション』
人間がいない、デジタルワールドのデジモンだけの世界で、しかも映像としてはフルＣＧなんだよ）

フルＣＧの世界からも。それでは、この世界も他から見るとアニメの世界というのも本当なのだろうか。

（自分がどの世界にいたのか悩んでたみたいだけど、ちょっと外から見るとそんなに差がないんだよ。君は君で今ここにいるんだからね。それが一番大切なこと）

何か少しわかりかけた気がした。

（もっと説明したいけど、あまり時間がない、まだ他の世界からもきてるし、ええと、ただ、ぼくの世界からはあまり呼んでこれなかったんだけど）

「なんだ、俺さまだけじゃ不満ていうのか」

いきなり聞こえた別の声に振り向くと、巨大なバイクに乗ったマスクをした人間型のデジモンがいた。もちろん普通の人間よりははるかに大きい。この部屋にそんなものが入るスペースがある訳がない。よく見ると少し透けてて、立体映像のようだった。

（そういう訳じゃないよ、ベルゼブモン）

「じゃあ、いくぜ！」

ベルゼブモンはバイクごと映像に突っ込み、九龍城寨の前に急降下していった。空中からでも両腕の銃を発射。黒デジモンたちが粉々にされていく。

「やれやれ、相変わらずだねえ」

別の声が聞こえた。やたらと爽やかな青年が、ちょっと怖そうなデジモンと共にいる。

（あ、リョウさん）

「呼ばれてないのにきちゃった。

俺はちょっと挨拶したいからあっちにいくよ」

秋山リョウとサイバードラモンはアラモ砦の映像に入っていった。

（じゃあぼくもこれで。また会うことがあったら、今度は声だけじゃなく会ってみたいね）

待ってくれ　君は一体

（ぼくは松田タカト　テイマーだ）

静かになった。ルイはそこまできて、タケルがいつの間にか研究所の応接室からいなくなっていたことに気づいた。

45

九龍城寨の東、これまで黒デジモンたちがきたのとは反対側から突然黒い雲が湧き上がった。飛行型の黒いデジモンの群れだ。アプモンのチームや香港の三兄弟たちは砦の東側に急いだ。黒い雲は地上型デジモンたちとは比べ物にならない速さで近づいてくる。その数も更に数倍。

中空に声が響いた。

「ファイナル・エリシオン！」

北の奥からとてつもない大きさのエネルギー波が空を渡り黒い雲にぶつかる。その一撃で東から来た黒いデジモンたちは半分以下になってしまった。

天空の彼方から赤いマントをはためかせた白い聖騎士型デジモンが、まっすぐ立った姿勢のまま下降してくる。

「このデュークモン、助けを求める声に応じて参上した」

（ありがとう、デュークモン！）

「そなただな、求める声の主は」

（そうだよ。デュークモンの姿を見ることが出来るなんて）

「その声。初めて聞いたはずだが、なにやら懐かしい」

そうしている間にも近づく黒いデジモンの残党は、デュークモンの右腕から伸びる光の槍によって次々と消滅させられていく。

46

アラモ砦の西側から迫っていた黒いデジモンたちの先鋒が、多数の種類の連続攻撃で砕け散った。

「あれは。太一さんたちだ！」

砦外壁の上から見ていた大輔が驚きの声を出した。

「小学生の頃の」

「そうなのか」

その頃の太一を知らない賢も驚きの目で見ている。

「えー、でもあれは私たちとは違うわ」

ミミに言われてよく見ると、グレイモンやガルルモンも少し違う進化をしていた。知らないデジモンたちも多数連れている。『デジモンアドベンチャー：』と呼ばれる世界の太一たちなのだが、大輔たちはその名を知らない。

「別の世界の太一さんたちかあ。どこの世界でも太一さんは強ええなあ」

「よく見ろ大輔、後ろの方から来るのは」
「あーー！　俺たちだ！　小学生の頃の！　あそこの太一さんたちと同じくらいの歳になってる」
「別の世界で別の時間の人たちが一緒に来たってことなのか」
「なんかそれで喜んでた人がいたの思い出したぞ。あんとき、おれもちょっとの間だけ太一さんと同い年になって戦ったんだ」
賢も思い出してきた。
「そんなことがあったような気もする。でも、それっていつのことだったんだ」
「あまり気にしなくていいんじゃないかな」
振り向くと、さっきまで誰もいなかったところに爽やかな青年と怖そうなデジモンがいた。
「今ある自分を信じることが一番だよ」
「あなたとは、前に会ったことが」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。でも気にしなくていいって。俺もよくわかってないからね」
言いながら秋山リョウは彼のデジヴァイス、ディーアークの溝にカードを滑らせた。怖そうなデジモン、サイバードラモンが赤いマフラーをした正義のヒーローのようなデジモン、ジャスティモンに進化する。
「じゃ、また！」
ジャスティモンは黒いデジモンたちに飛び込んでいき、たちまち大きく道を開いていった。

47

「じゃあ行くよ、パタモン」
「いよいよだね！」
タケルとパタモンは薄暗い霧の中へ歩いていった。

「わてもやりまっせ」
研究所屋上、光子郎の前でカブテリモンが完全体のアトラーカブテリモンに進化する。
「頼みましたよ！」
周囲の半デジタル空間のあちこちで攻防が繰り広げられていた。
戦っているのはヒカリや京たちだけではない。
「ここ、すこしミラーワールドに似てる」
「気を抜くんじゃないわよ！！」

「わかってるってな！」
ビートブレイクのチームも戦いは慣れている。
「アマノカワくん！」
明るい髪色の少年が屋上への入り口をあけてきた。
「ダーリン、こっちじゃないさ！」
クラゲのような頭部を持つ小型のデジモンが追ってきた。
「ええ？　アマノカワくんの声がしませんでした？」
小型のデジモンは少年を引っ張り、戻っていった。
「誰だ、今の」
シルフィーモンが見ていたが
「気にしないほうがいいかも」
ヒカリはあっさりと答えた。

巨大な鳥人が掌に空と、太一、ヤマトを乗せて猛スピードで飛んでいる。ピヨモンが進化した完全体ガルダモンだ。黒いデジモン群の真ん中に切り開かれた広い道をたどり、メタルグレイモン、ワーガルルモンのいる最前線にあっという間に着いて太一、ヤマトを降ろした。

「砦の方は心配ないから！」

「わかってるって」

「行ってくるぞ」

太一、ヤマトはメタルグレイモン、ワーガルルモンに乗って先へ進んでいく。

殲滅を逃れて砦まで近づいた黒デジモンの一頭が賢に迫る。横から飛び出たモノクロモンが体当たりで蹴散らした。

「ぼーっとしてないでよ！　ケンが怪我したらミヤコに怒られちゃうからね！」

モノクロモンのパートナー、チチョスが檄を飛ばした。

「うん、ありがとう」

「いくぞ、賢」
大輔と賢はテータムのパートナー、エアドラモンにのってパイルドラモンのところまで飛んで行った。

アルケニモンは疲れていた。数時間前まで成長期から先の進化をしたことがなかったのだから無理もない。勢いで一頭だけ敵の真ん中まで進んだため、周囲を取り囲まれてしまった。反応しようにも腕の動きも遅い。黒いデジモンが迫る。そこに閃光と銃撃音が走り、数頭の黒デジモンが吹っ飛んだ。
「そこの綺麗なおねーさん、気をつけたほうがいいぜ」
全身に包帯を巻き付かせたミイラ男のようなデジモン、マミーモンが巨大な銃オベリスクを振り回している。アルケニモンには分からないことだが、このマミーモンは質感が違う。「ゼボリューション」の世界から来たのだ。
「俺だけはぐれてこっちに来ちまったけど、これでよかったみたいだな」

反対側の上空から同じくオベリスクの発する閃光が降りそそぎ、数頭の黒デジモンが砕け散った後に白衣をまとった大男が着地した。
「おねーさんは下品だな。お嬢さんと言え」
また別の世界からきたマミーモンだ。その胸元の聴診器に丈が気がついた。
「医者のマミーモンだって？」
背後でガラスの割れる音と共に悲鳴が聞こえた。姫川マキの声だ。慌てて療養所内に戻ると、病室の方から金髪の青年が出てきた。
「もう撃退した。ぼくも医者だ。大丈夫」
その奥、病室内には青いケモノ型デジモンの姿が見える。
「敵はこっち側からもきてるけど、ぼくの仲間たちがなんとかするよ」
廊下の奥に数人の人影が見えた。
「あ、ぼくはトーマ。こっちはガオモン、よろしく」
彼らは『デジモンセイバーズ』の世界から来ている。
「彼一人だけで十分足りてそうだけどね」

玄関の外に髪を後ろで縛った青年がアグモンと共に飛び出し、素手で黒いデジモンを殴り飛ばす。それをきっかけに激しい戦闘の音が響いてきた。

「あの人たちも強いよねー」
ミミが見てるのは「フロンティア」チームだ。
「あのデジモンと、あっちのデジモン、人間の時は双子の兄弟なんだって」
「双子」
ウォレスはその言葉が気になった。テリアモンも見ている。
「思い出してきた？」
「そうだ、双子だ。ぼくにも双子の兄弟がいたんだ。
どうして忘れてたんだろう」
テリアモンを見る。
「それできみたちも双子だったんだ」
「やっと思い出したね。これで進化できるよ」

テリアモンは両手に重火器を装備したガルゴモンに進化し、黒いデジモンたちの攻撃に向かった。

九龍城寨から西の果て。暗い森がどこまでも広がっている。その途中に万里の長城のような城壁が地平線の端から端まで伸びている。メタルグレイモンとワーガルルモンが一撃でその壁を打ちやぶり、侵攻した。壁はその奥に何重にも続いている。

パイルドラモンはさらに進化し、巨大な竜型のインペリアルドラモンとなった。大輔、賢だけでなく他の世界からの人やデジモンも載せて黒いデジモンたちが吹き出した地点へ向かう。天をつく巨木が倒れた後に広大な穴が開いていた。最高速度のままその穴に突っ込んで行った。

「あれは、何をやってるんだい」

どこまでも霧に包まれた灰色の世界で明るい髪の少年、東御手洗清司郎（ひがしみたらいきよしろう）はやっとたどり着いた仲間の元で尋ねた。ちょっと小柄な少年天ノ河宙（あまのかわひろ）と彼に肩車してもらってる白い小さな竜型のデジモン、ガンマモン。髪の長い少女月夜野瑠璃（つきよのるり）と、大人より大きくふさふさの毛に覆われた黄色いデジモン、アンゴラモン。彼らは『デジモンゴーストゲーム』の世界から来ていた。

「私たちとここに来てから、ずっと語りかけてるの」

瑠璃の言葉で目を凝らす。

霧の向こうに清司郎よりちょっと上の青年と、小さな黄色いデジモンがいる。タケルとパタモンだ。

「まさか……あのデジモンに」

タケルの向こうはどうやら海だ。その奥に、霧に隠れてよくは見えないが巨大で禍々しい影がいる。

「あれってダゴモンさ」

清司郎のパートナー、クラゲのようなデジモンで空中に浮いているジェリーモンが言った。
「それは無理ゲーってやつさ」
「そうじゃないんだ」
アンゴラモンが静かに話し始めた。
「語りかけてる相手はデジモンじゃない。海になんだ。この世界はいろんな邪念が集まって出来ている。あの海こそがその本体で、見えてるダゴモンは本当のデジモンじゃない」
「そ、そうなのかい？」
「彼。タケルがそう言ってるんだ。それが本当かどうかわからないけど。タケルは十年前にもここに来たことがあるらしい。きっと僕ら、デジモンやそのパートナーを脅かすためにデジモンの形を取ったのだろう、この海にはそういう色んなデジモンのデータもどこかから流れてきてて」
アンゴラモンは耳がいい。全て聞き取れてるらしい。

「でもそれがずっとアップデートされてないみたいだね。ダゴモンはデジモンとしては完全体。当時ではそこそこ強い部類に入っていたかもしれないけど、今はもっと強いデジモンがいくらでもいる。パタモンも、ってあの小さいデジモンのことだね。前に来た時はアーマー進化までしかできなかったけど、もっと強い形に進化できるんだ。ダゴモンはまるで怖くない。それに、自分だけじゃなくて他の世界でダゴモンを倒した人たちにも来てもらった」

「ぼくたちのことか」

「だけじゃないですよ、先輩」

宙が指差す方を見ると、四角いゴーグルの上に髪を逆立てた少年と小さな青いデジモン。明石タギルとガムドラモンだ。さらに女性やサブマリモンもいる。

「デジモンクロスウォーズ、という世界から来たそうです」

アンゴラモンが軽く片手を上げて、静かにと示した。

「観念するんだね、さもないと、みたいなことを言ってる」

その言葉が終わらないうちにタケルの横のパタモンが光を放ち始めた。

48

「いつまでも戦い、終わらないねえ」

幾重もの城壁を打ち破った先の岩の上に太一たちがいる。今は待ちの時間だ。アグモンに太一が答えた。

「まだまだこれからさ。でも、負けるわけにはいかない」

太一がいうのは今この戦いが終わっても敵がなくなるわけではない。それはデジモンだけではなく、現実世界との戦いもあることを意味している。

「オレたちを信じている人たちがいる限り、な」

ヤマトもこれまで戦ってきた仲間、救助してきた子供たち、その家族たちのことを思い出している。

二人ともその活動で随分悲惨な現場も目にしてきた。内戦や紛争に巻き込まれた地域にも行った。子供の救助がどうしてもできない場合もあった。自分の力不足だと慟哭する太一。先に心が折れそうだったヤマトは自分の感情をうまく外に出せないでいたのが、その太一によってかえって救われた気がした。そうでなければヤマトが壊れていたにちがいない。それ以来の太一は子供達を絶対に救うことを最優先にしている。あまりの決意の固さに、一時期は保護区の子供に怖がられることもあった。少し経って表面上は少し軽めの言動を装うことも覚えた。だがわずかでも異変を察知すれば本気の表情に戻る。場合によってはかなり苛烈な手段を使うこともためらわない。その太一がヤマトとガブモンを信頼していることもわかってる。二人と二体はずっと前方を見据えてる。

暗い空の彼方からインペリアルドラモンが飛んできた。

巨木の下に空いた穴が、デジタルワールドに時々出現するワープ地点のような現象をおこしていて、この森の近くに繋がっていたのだ。

巨大な竜型デジモンは太一たちを通り越して森の奥にそびえる黒い城に向き合った。ヨーロッパの巨城のような、しかし使われた石材はかなり黒い。
インペリアルドラモンの背中のドームにいる賢と大輔は不思議な感じに囚われていた。
「この城、何度も見たような気がする」
「おれもだ」
光子郎の推論ではその城が全ての黒いデジモン、ダークタワー、黒い歯車などの発生源だ。直接デジモンたちを送り込める距離に九龍城寨、巨木の下を通ってアラモ砦に闇の力を送り出していたはず。
「じゃあ、行くぜ」
インペリアルドラモンが大口径のレーザーを発射。城はその一撃で吹き飛び、炎が広がったあと黒い煙が空高くまで伸びていった。その中に影が見えてきた。
「メガデス！」

インペリアルドラモンから超質量の暗黒物質が放出された。眼前に立ち上る黒煙が吸収されていき、その奥にいたものが姿を現す。全身をフードのあるケープに包まれた巨大なデジモンだ。高さは百メートル以上あるのではないか。メガデスはその中に吸い込まれてしまった。

「やっぱりあいつか」

「前よりも随分でかいな」

フードを被ったデジモン、デーモンはその本体を見せないまま両腕をゆっくりと広げていく。

「来るぞ！」

「避けろ」

デーモンの前面から暗黒のエネルギーが放射された。それに当たれば全てが消滅する。巨龍はかわした。エネルギーが通り過ぎたあとに、長円のクレーターが形成された。その奥からこちらに向かって来るものたちが見えてきた。二つの砦を襲った黒デジモンたちを討伐し終えたデジモンたちだ。

デーモンの足元の岩場にいる太一はそれをゴーグルで確認した。
「がんばるよ、オレ」
ガブモンがかまえた。全身が光り始める。
「頼りにしてるぞ」
ヤマトが答えた後にアグモンもかまえ、光り始めた。
「任せといて」
「よーーーし」
太一が腕を上げた。
「行くぜ！」
二体のデジモンが進化、ウォーグレイモン、メタルガルルモンとなって巨大なデーモンに向かって飛びたつ。多数の世界のデジモンたちが後に続いた。

49

霧の奥にダゴモンの影がうねうねと蠢いている。全身から触手のようなものが伸び、数倍の大きさにまで膨れ上がった後、一つの形にまとまって行く。二対の翼、異様に長く伸びた腕。

「ディージャンモン。究極体だ」

アンゴラモンが呟いた。

タケルはひそかに微笑んだ。隣にはパタモンが進化した天使型デジモン、エンジェモンがいる。

「タケルさん」

声に振り向いた。伊織とアルマジモンがそこにいた。

「伊織、来たのかい」

「療養所は助けの人たちで大丈夫だからって、送り出してくれたんです。こっちにもサブマリモンがいるんですね」

伊織は水際にいる女性とそのデジモンを見たあとディージャンモンに向く。
「あのおぞましいデジモンが相手ですか」
「ああ。でもはっきりとデジモンになったからね。本当にデジモンなのかどうかわからないものよりは相手にしやすいはずだよ」
そういう狙いだったのか、と聞いていた宙たちは理解した。
「もちろん全力を尽くさないといけないけどね」
「では、行きましょう、アルマジモン！」
「ラジャーだぎゃ！」
アルマジモンはアンキロモンに進化し、エンジェモンとジョグレス進化を始めた。
「他の世界から来た皆さんも、よろしくおねがいします！」
宙たちのデジモンや、明石タギルのガムドラモンも進化をはじめた。

50

デーモンは二〇〇二年の暮れに大輔たちが戦い、その強さに当時の大輔たちの力では倒すことは出来ず、やむなく別世界に追放したデジモンだ。追放先のダゴモンのいる暗黒の海は、当時は通常のやり方ではゲートを開けない特殊なところだった。デーモンもそう簡単には出てこれないだろう。しかし、いつかは来る。そして現実世界なりデジタルワールドなりに脅威を及ぼすことになるはずだ。太一たちはその心構えは忘れてなかった。

暗黒の海にはタケルやヒカリ、賢だけではなく西島や姫川マキ、ルイまで関係したらしい。それもあって、ルイたち「別の時間や世界の記憶を持つものたち」が黒い闇の力の尖兵ではないかととも考えたのだがそういうわけではなかった。彼らはマーカーとして利用されたに過ぎない。

十一年の時を経てそのデーモンがついに復活してきた。

おそらくは暗黒の海を利用し、力を十分に蓄えて続けていたのだろう。黒い歯車をはじめとして十年以上前に使われた道具がつかわれたのもその頃のデータからの再利用だ。それらは小手調べに過ぎず、本体は黒いデジモンの大量生産だった。そして、デーモン本体も数倍強力になっている。大輔たちは地上に降り、インペリアルドラモンは竜型から戦士型に姿を変えた。

「十年前の宿題、おわらせてやるぜーーー！」

大輔たちと共に降りた他の世界のデジモンたち、巨木の穴を通ってきたものたち、メタルグレイモンとワーガルルモンが切り開いた道を通ってきたものたち、全てが総攻撃を開始した。しかしデーモンの巨体に大してダメージにはなってないように見える。

「デーモンには元々本体はないのかもしれません。通常の攻撃では意味がない。さらに暗黒の海からのエネルギーを得てます。そのルートを絶てば勝機をつかめる。それはおそらくあのローブの中にあるはずです。ただし、別世界同士を繋いでいる道です。データ化される世界になるかもしれません」

光子郎の推論に基づいて、太一、ヤマトとウォーグレイモン、メタルガルルモンはデーモンの衣服の奥の空間に潜っていた。そこに肉体はなく、物理的な空間ですらない。完全な闇としか見えない世界で方向を定めるのに光子郎が開発したゴーグルの新機能が役に立った。闇のデジモンの力の周波数を感知するのだ。

「あそこだ！」

二体のデジモンが集中攻撃して、突破口を開いた。太一が手を伸ばす。闇が開き、白い空間へ飛び込んだ。デジモンたちは究極体から成長期にもどってしまった。

「ここからだ」

「俺たちの本気を見せてやるぜ」

51

巨大な遮光器土偶のようなデジモン、シャッコウモンはエンジェモンとアンキロモンがジョグレス進化した姿だ。ディージャンモンの攻撃を吸収し、無効化していく。宙たちのデジモンたちが究極体にまで進化し、ディージャンモンを追い詰めた。しかしなかなか決着がつかない。

暗黒の海の上空に光が差した。天に穴が空いて光芒が溢れている。そこから白く細身のデジモンがマントを翻しながら下降してきた。アグモン、ガブモンたちが進化したオメガモンだ。肩に太一とヤマトがいる。

オメガモンは左手の剣を振りかざし、ディージャンモンを両断した。すぐに上の穴へ向けて右手からエネルギー弾を発射。穴の奥の白い空間はひとたまりもなく砕ける。

同時に地上のデーモンもそのローブが散り散りになって消えていった。

戦いは終わった。

52

「ぼくたちが別の世界に戦いにいった記憶は、やっぱり本当だったんですね」
光子郎は温かいお茶を飲んでいる。
「ゲンナイさんから連絡もらった時はまだ半信半疑だったんです。いまだに時間軸や時系列がはっきりしませんが」
「まあいいじゃないか、とにかく今回は助けてもらったんだし」
太一たちは研究所に戻ってきていた。屋上や療養所からも。この応接室が人でいっぱいになるのは初めてのことかもしれない。
「で、きみが」
太一がルイに近づいた。
「ルイくんと、ウッコモンだな」
「ウッコモン！？　どこに」
「いるじゃないか。その右目」

応接室にいた一同はルイの右目を見た。長くした前髪に隠れがちな右目。その普通の眼球の上を白い何かが覆っている。
「それが本体なのか、一部なのかわからないが、もういいだろう。ルイに本当のことを伝えても。そのためにお前がいつまでも悪者になってることはない」
「一体、なにを。どういうことなんです」
太一はゆっくりと説明をはじめた。

ルイの母は寝たきりのルイの父の介護に疲れ果て、無理心中をはかった。ちょうどその時にウッコモンが現れてルイの命は救った。だが、まだその時のルイは両親のことを受け止めるには幼なすぎた。ウッコモンは自分がいろんな能力を持ったデジモンだと信じ込ませるために、ルイに世界最初のパートナーデジモンを持つ子どもだと思わせる道を選んだ。その後時間をかけて数年分の生活の記憶を作った。その上で、悪いのは両親ではない。ウッコモンだという結末を用意した。ルイはそれで両親を憎まずに済んだ。

「今日も助けに来てくれた中に、松田タカトって人がいたはずなんだ。その人と前に会った時、そっちの世界ではデジモンに近いけどデジモンそのものじゃない、デジノームってのがいるって話を聞いてた。さっき思い出したよ。お前もデジモンというよりそのデジノームとかに近いかもしれない。でも、もういいだろう。ルイは幼くない。そろそろ本当の人生を歩ませてやれよ」

ルイの右目から大量の涙が流れ落ち、右目を覆っていた白いものは消えてしまった。

他の場所でこの世界と、別の世界から人やデジモンたちはそれぞれの別れをしていた。丈は最後まで白衣のマミーモンにデジモンの医療について聞いていた。

53

しばらくして、メノアがルイと話していた。
「私は自分のパートナー、モルフォモンを探しにデジタルワールドに行くわ。ここでの研究もあとはイジーに任せて良さそうだし。ニシジマのリハビリが済んだらヒメカワマキもそうするそうよ。あなたはどうする？」
「自分のパートナーデジモン、ウッコモン。本当にいるのかどうか」
「そんなの行ってみなきゃわからないわよ。モチヅキメイもずっと前から行ってる。まだ見つからないけど諦めないって」
「それもそうですね」
結局ルイも行くことにした。ゲートに入る前に、ルイはタケルに一つだけお願いがあるのだけど、と切り出した。
「前に車の中でずっと話してくれた、子供の頃の冒険のことなんですが」
「ああ、あれかい。長い話になっちゃったよね」

「そんなに他の人には話してないんでしょうか」
「あの時は時間があったからたくさん話しできたけど、なかなかそういう機会ないから全部話すことはあまりないなあ」
「あれ、すごく、いい話だったんです。人とデジモンがどう一緒に生きて行くか。今でもパートナーデジモンを持つ人は増えてるんでしょう？　その人たちに、伝えるとすごくためになると思うんです」
「でもそんなたくさんの人に話すことも」
「では、本に書くのはどうですか。文章なら翻訳して他の国の子供でも読めるし。大人でも」
「そうだね。考えとくよ」

そうしてルイとメノアはデジタルワールドに向かった。二人とも初めて行く世界だ。広い草原の向こうから、二人を迎えるようにたくさんの蝶が飛んできた。

５４

「タケル～～～、これで終わり？」
パソコンに打ち込んでるタケルのそばで見ていたパタモンが口を挟んだ。
「まあ大体ね。何か気になるかい？」
「あの、最初の北欧の少年のこと」
「ああそうだった。でもあれはまた別の話だからね」
「そうだったっけ。じゃ、楽しみにしてるよ」

おわり